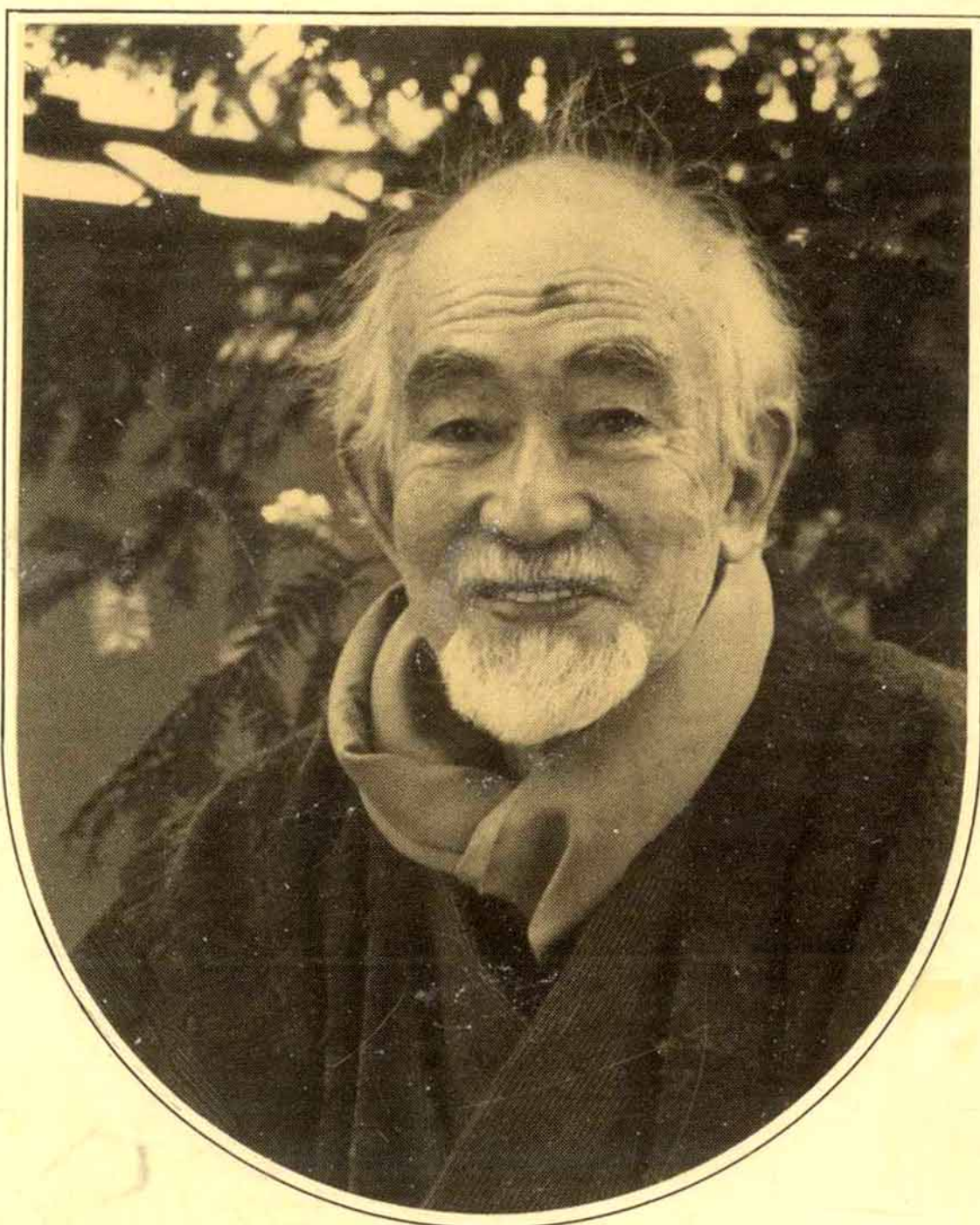


暗夜行路 (前篇)

志賀直哉



新潮文庫



ろ 路
こ う 行
や 夜
あ ん 暗
前 篇

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 30 B

昭和二十六年九月三十日 発行
昭和四十二年十月三十日 四十一刷改版
昭和五十一年九月三十日 五十三刷

著 者 志 賀 直 哉

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社

製本・加藤製本株式会社

© Naokichi Shiga 1951

Printed in Japan

新 潮 文 庫

暗 夜 行 路

前 篇

志 賀 直 哉 著



新 潮 社 版

第 第 序

目次

詞	一	二
.....		
七	一九	二三五

暗
夜
行
路
前
篇

武者小路実篤きねあつ兄に捧ぐ

序

詞

（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月程経って、不意に祖父が私の前に現われて来た、その時であった。私の六歳の時であった。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでいると、見知らぬ老人が其処へ来て立った。眼の落ち窪んだ、猫脊の何となく見すばらしい老人だった。私は何という事なくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作って何か私に話しかけようとした。然し私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いて了った。釣上った口元、それを囲んだ深い皺、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でそう思いながら、尚意固地に下を向いていた。

然し老人は中々その場を立去ろうとはしなかった。私は妙に居堪らない気持ちになって来た。私は不意に立上って門内へ駆け込んだ。その時、

「オイオイお前は謙作かネ」と老人が背後から云った。

私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立止った。振返った私は心では用心していたが、首はいつか音なく点頭して了った。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振った。然しこのうわ手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て、私の頭へ手をやり、

「大きくなった」と云った。

この老人が何者であるか、私には解らなかった。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親で

ある事を既に感じていた。私は息苦しくなって来た。

老人はそのまま帰って行った。

二三日するとその老人は又やって来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。更に十日程すると、何故か私だけがその祖父の家に引きとられる事になった。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行った。

其処には祖父の他にお栄という二十三四の女が居た。

私の周囲の空気は全く今までとは変っていた。総てが貧乏臭く下品だった。

他の同胞が皆自家に残っているのに、自分だけがこの下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかった。然し不公平には幼児から慣らされていた。今に始まった事でないだけ、何故かを他人に訊く気も私には起らなかった。然しこういう風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだろうと云う漠然とした予感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二カ月前に死んだ母を憶い、悲しい氣持になった。

父は私に積極的につらく当る事はなかったが、常に常に冷たかった。が、この事には私は余りに慣らされていた。それが私にとって父子関係の経験としての全体だった。私は他の同胞の同じ経験をそれに比較するさえ知らなかった。それ故私はその事をそう悲しくは感じなかった。

母は何分かと云えば私には邪慳だった。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあった。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるような事がよくあった。然し、それにもかかわらず、私は心から母を慕い愛していた。

四つか五つか忘れた。とにかく、秋の夕方の事だった。私は人々が夕餉ゆうげの支度で忙しく働いている隙に、しも手洗場ちようすばの屋根へ懸け捨ててあった梯子はしごから誰にも気づかれずに一人、母屋の屋根へ登って行った事がある。棟伝むねつたいに鬼瓦の処まで行って馬乗りになると、変に快活な気分になって、私は大きな声で唱歌を唄っていた。私としてはこんな高い処へ登ったのは初めてだった。普段下からばかり見上げていた柿の木が、今は足の下にある。西の空が美しく夕映ゆうばえている。烏からすが忙しく飛んでいる……

間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪い程優しい調子だった。

「あのネ、其処にじっとしているのよ。動くのじゃ、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其処に音なしひどくしているのよ」

母の眼は少し釣上ひどって見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了おうと思った。そして馬乗りのまま少し後あとじさった。

「ああっ！」母は恐怖から泣きそうな表情をした。「謙作は音なしひどいこと。お母さんの云う事をよくきくのネ」

私はじっと眼を放さずにいる、変に鋭い母の視線から縛られたようになって、身動きが出来なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈はげしく打たれた。母は亢奮こうふんから泣き出した。

母に死なれてからこの記憶は急に明瞭^{はつきり}して来た。後年もこれを憶う度、いつも私は涙を誘われた。何といっても母だけは本統に自分を愛していてくれた、私はそう思う。

前後はわからない。が、その頃に違いない。

私は一人茶の間で寝ころんでいた。其処に父が帰って来た。父は黙って、袂^{たもと}から菓子^{ちやだんす}の紙包を出し、茶^{ちやだんす}箆^すの上に置いて出て行った。私は寝たまま、じろじろそれを見ていた。

父が又入って来た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞い込んで、出て行った。

私はむっとした。気分が急に暗くなった。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持って、次の間へ入って来た。私には我儘な気持が無闇と込み上げて来た。泣きたいような、怒りたいような気持だった。

「母さん、お菓子」

「何を云うんです」母は言下に叱った。その少し前に私はその日のおやつを貰っていたのだ。

「何か。よう、何か」

母は応じなかった。そして、畳んだ着物を箆^すへ仕舞って出て行こうとした。

私は起き上って、

「よう、何か」こういって、母の前へ立ちふさがった。母は黙って私の頬をぐいとつねった。私は怒ってその手をビシャリと打った。

「もう食べたじゃ、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持って帰った菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は権利をでも主張するように頑固に首を振った。何しろ、私は氣持がクシヤクシヤしてかなわなかった。その菓子がそれ程に食いたいのではない。とにかく、思い切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が変えられなくなっていた。母は私の手を振り払って、出て行こうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に擱まった。その障子がはずれた。

母は本気で怒り出した。そして、私の手首を掴み、ぐんぐん戸棚の前へ引張って行った。母は片腕で私の頭を抱えて置いて、いやがる私の口へその厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食いしばっている味噌歯の間から、羊羹が細い棒になって入って来るのを感じながら、私は度胆を抜かれて、泣く事も出来なかった。

亢奮から、母は急に泣出した。少時して私も烈しく泣出した。

根岸の家では総てが自堕落だった。祖父は朝起きると楊子をくわえて銭湯へ出かけた。そして帰るとその寝間着姿で朝餉の膳に向った。

来る客も変った色々な種類の人間が来た。殊に花合戦をする、その晩には妙な取合せの人々が集まって来た。大学生、それから古道具屋、それから小説家（？）それから山上さんと皆が云っている五十余の一寸未亡人らしい女などであった。この女はその頃の医者が持つような小さい黒革の手さげ鞆を持って来た。それには、きまって沢山な小銭と、一揃いの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入っていたそうである。然しこの女は未亡人ではなく、その頃大学で歴史を教えていた或

る年寄った教授の細君で、この女の甥が嘗てお栄と同棲していた、その縁故で、良人に隠れて好きな遊び事の爲めに来たのだと云うことである。その甥と云う男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨まで浸み貫った放蕩者で、とうとうその二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して、了ったと云う事を私は二十年程してお栄から聞いた。

山上と云う女は十時頃には大概帰って行った。するとその頃になって、東京者の癖に大阪弁ばかり使う若い寄席芸人がよく仲間へ入りに来た。

お栄は勝負には入らなかったが、祖父の勝敗には多分實際上の気持から、よく焦慮して口出しをしていた。そう云う時、いつも下品な皮肉を云って皆を笑わせるのはその寄席芸人であった。

後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたろうと、よく考えた。月々困らぬだけの金は父から来ていたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の売り買いをしたり、がらくた道具屋の競売に家を貸して席料を取ったりした。もうけずく以上、祖父の趣味のようにも思えた。

お栄は普段少しも美しい女ではなかった。然し湯上りに濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。そう云う時、お栄は妙に浮き浮きとする事があった。祖父と酒を飲むと、その頃の流行歌を小声で唄ったりした。そして、酔うと不意に私を膝へ抱き上げて、力のあたる太い腕で、じっと抱き締めたりする事があった。私は苦しいままに、何かしら気の遠くなるような快感を感じた。

私は祖父を仕舞いまで好きになれなかった。寧ろ嫌いになった。然しお栄は段々に好きになつて行った。

根岸の家へ移って半年余り経った或る日曜日か祭日かの事であった。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行った。丁度兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云う未だ一年にならぬ赤児とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、その日父は珍らしく機嫌がよかった。父はいつにない愛想らしい事を私に云った。父としてはそれは気まぐれだった。何かその日気分がいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるような心持で、祖父が茶の間へ引きかえてからも、一人其処に残っていた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとろうか」父は不意にこんな事を云い出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現わして喜んだに違いない。そして首肯した。

「さあ、来い」父は坐ったまま、両手を出して、かまえた。

私は飛び起き様に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかって行った。

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突返しながら云った。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかって行った。

私はもう有頂天になった。自身がどれ程強いかを父に見せてやる気だった。実際角力に勝ちたいと云うより、私の気持では自分の強さを父に感服させたい方だった。私は突返される度に遮二無二ぶつかって行った。こんな事は父との関係では嘗てなかつた事だ。私は身体全体で嬉しがつた。そして、おどり上り、全身の力で立向かつた。然し父は中々私のために負けてはくれなかつた。